

# 臨床場面における Psychological Mindedness 概念の今日的意義

The today's meaning of the perspective  
of Psychological Mindedness in clinical area

高岸 幸弘\*  
Yukihiro TAKAGISHI

## Abstract

Since the birth of psychoanalysis, Psychological Mindedness (PM) has been perceived as one of the most important attributions of clients who are expected to have a positive treatment effect in psychotherapy. Since the 1970s, although researchers have defined PM in various ways, they have not shared common concept of the definition because they have differential emphatic points. In the 1990s, the definition of PM has been clarified by Hall's comprehensive definition with her reviewing previous researches, and it is now perceived as not only an adaptive attribution to psychoanalysis, but also as a personality trait in a broader sense. Empirical studies on PM have recently been accumulated. In this paper, the history of the definitions of PM was organized and the main features of the structure in PM were clarified based on the results of the empirical studies. Why PM should be focused in clinical area was discussed based on the acknowledgment.

キーワード：Psychological Mindedness, 実証研究, パーソナリティ特性

## I はじめに

自己内部で生じていることに注目しようとする傾向は Psychological Mindedness (PM) と呼ばれる。精神分析においては、この用語が提唱される以前から、PM は精神分析を受けるクライアントに必要な特性と考えられてきた<sup>1, 2)</sup>。精神分析の創始者である Freud は、精神分析を成功裏に進めるためには、クライアントが精神病水準ではなく、分析によって内的な体験が病的に行かない“標準的な精神状態”で自己探索を行うことができる能力、つまり内省力を有していることが必要であると述べているほか<sup>3, 4)</sup> クライアントが自我の回復性 (ego modification) を備えており、過去の体験に注目しそれを洞察する能力を必要としていることを述べている<sup>5)</sup>。これら内省する能力や過去の体験に意味づけを試みようとする傾向は PM の中心概念の一つである。

---

\* 関西国際大学人間科学部

Freud以降も、精神分析の適応のためのクライアントの属性として内省能力としてのPMが必要であることはいくつかの文献の中にみられ<sup>6)</sup>、また、精神力動的心理療法の著名なトレーニング機関の一つである1919年設立のメンンガー財団(Menninger Foundation)での訓練や実践では、PMという用語は設立当初から一般的に使用されていた<sup>1)</sup>。

しかしながら、1970年代までは分析家の間でもPMについて学術的に議論されることはほとんどなかった。実際、米国精神分析協会(American Psychoanalytic Association)が1968年に出版した精神分析用語集である「A Glossary of Psychoanalytic Terms and Concepts<sup>7)</sup>」にもPMという用語は登場していないし、それ以前の文献でもPMそのものが議論されたものは見当たらない。そのような中1970年代に入ると、この用語を正確に定義づけし使用すべきではないかという議論が盛んとなり<sup>8)</sup>、Appelbaumの定義づけ<sup>1)</sup>を皮切りにさまざまな定義が提案された。その後1992年にHallがPM研究のレビューと包括的定義の構築を提示した<sup>9)</sup>ことで定義の議論は収まり、その後は測定尺度の開発とそれらをもとにした実証研究が報告されるようになった。今日では精神分析に限らず、PMはパーソナリティ属性の一つとしてとらえられている。ただ、実証研究の報告が蓄積されつつある一方で、これらを踏まえた臨床実践の議論は現時点ではほとんどなされていない。PMの実証研究は基礎と臨床両面からなされていることを鑑みると、今日の臨床場面におけるPMの応用の可能性を模索することは有意義と考えられる。そこで本稿では、研究者らによって提唱された種々のPMの定義を整理したのち、近年の実証研究の報告を概観する。その上で、PMを臨床場面で用いることの今日的意義を検討する。

## II Psychological Mindedness (PM) の定義と特徴

最初にPMの概念的な定義づけを行ったのは、Appelbaum<sup>1)</sup>である。Appelbaumは、PMを「自分の経験や行動の意味や原因を知る目的のために思考、感情、行動の間の関係性を理解する能力：a person's ability to see relationships among thoughts, feelings, and actions, with the goal of learning the meanings and causes of his experience and behavior (p. 36)」と定義した。このAppelbaumの定義のように初期の研究の多くは、PMを、心理療法プロセスにおいて内面に注目し、行動や問題の原因を心理的な観点から考察する傾向や能力をさす概念ととらえてきた。WolitzkyとReuben<sup>8)</sup>はPMの傾性の側面を強調し、「心理学的用語で行動を理解したり説明したりする傾向、すなわち行動をその人の欲求、願望、目的、意図、葛藤、防衛機制の表現やコミュニケーション手段として捉える傾向：a tendency to understand or explain behavior in psychological terms, that is, to view behavior as expressing and communicating information about the needs, wishes, purposes, intentions, conflicts, defensive strategies, etc. (p. 26)」と述べている。似た定義にGough<sup>10)</sup>の、「内的な要求、動機付け、そして他者の経験に対して関心と反応を示す人：One who is interested in, and responsive to, the inner needs, motives, and experiences of others (p.11)」がある。彼はこの定義をもとに測定尺度California Psychological Inventory (CPI)の開発を行った。

BaeklandとLundwall<sup>11)</sup>は、心理学的な問題の理解力という能力の面により力点を置いたPMの定義を提唱している。それによればPMは、「心理的な問題や対人的な問題を認識する能力、自分自身を心理学用語で捉える能力、心理学的構成概念を使用したり受け入れたりする能力、ある

いは少なくとも自分の症状や行動を心理学的な原因でイメージする能力：the patient's ability to recognize and admit psychological and interpersonal problems, to see himself in psychological terms, to use or to accept the use of psychological constructs, or to at least imagine psychological causes of his symptoms and behavior (p. 756)」である。彼らは心理療法からドロップアウトしてしまうクライアントの特徴を記述する中で、それらのクライアントの PM が乏しいことに注目し、PM が高いことが心理療法の継続に重要であることを主張した。反対に、高い PM を有していることは、心理療法の継続につながることで、そしてその結果心理療法からより多くの利益を得ると考えた。PM と心理療法の継続との関連性は、多くの研究者の間で経験的に共通認識されていることである。

Ryan と Cicchetti<sup>12)</sup> は、セラピスト - クライアントの治療同盟とクライアントの属性に関する研究<sup>13,14)</sup> をもとに PM の定義づけを行い、「患者の自分自身や困難に対する心理的構え (psychological set) の質であり、全ての力動的療法に不可欠なもの：the quality of the patient's psychological set toward himself/herself and his/her difficulties and is considered a necessary component for all psychodynamic psychotherapies (p. 720)」と提唱した。この定義によれば、問題や症状といった行動を内省し原因を模索する能力は、治療同盟を確立する上で欠かせない能力であり、力動的療法を行う際のクライアント側の重要な要素であることが分かる。

精神力動的療法への適応から PM を定義しようとするのではなく、社会・認知的側面を強調した定義がある。代表的なものは、「行動の行間を読む (能力)：reading between the lines of behavior (p. 183)」と述べた Dollinger ら<sup>15)</sup> の定義である。行動の行間を読むとは、他者の言動の言外の意味を読み取る能力、つまり他者の行動の背後にある防衛機制を把握したり、見せかけの行為を見分けたりする力であり、Dollinger らはそれらの能力に PM が寄与するとした。また、PM に男女差があることや、PM が単一の要素からなる概念ではないことなど、いくつかの理論的考察を行っている。

Hatcher ら<sup>16)</sup> は、認知発達の観点から、PM とは子どもの抽象的思考の発達の一つとして一定の発達パターンを示すものであり、人の動機、態度、性格の理解を含む「自己や他者の心理的理解を達成する能力：the capacity to achieve psychological understanding of the self and others (p. 308)」だと述べている。彼らは PM が発達の概念であることを前提として、Dollinger らが明らかにした PM の男女差を解釈した。女性は自己理解や共感性の特質が男性よりも高い傾向、つまり PM が高い点を考慮すると、女性の方がメンタルヘルスの専門家になることや、メンタルヘルスの専門家に相談することが多いことに説明がつくというのである。

このようにそれぞれの強調点の違いからいくつかの PM の定義が提唱されてきたが、Hall<sup>9)</sup> はこれらの研究をレビューし、情緒面と知的面の 2 要素からなる包括的な PM 概念を提案した。このモデルでは、PM には情緒面と知的面それぞれに関心の次元と能力の次元があり、関心の次元から能力の次元へと展開し、情緒面と知的面 2 つの能力が最終的な PM を構成する。なお、情緒的な PM 能力は知的な PM 能力に影響を及ぼす。このモデルにおける PM の定義は「情緒、知的両面から、心理的プロセス、関係性、意味に関する内省の関心と能力を示す程度によって示される：displayed by an individual to the extent that he or she displays both the interest in and

ability for reflectivity about psychological processes, relationship, and meaning, and across both affective and intellectual dimensions (p. 138)」である。この定義は Appelbaum の包括的な定義と同様、近年の実証研究<sup>17,18)</sup>においてもしばしば採用されている。知的側面と情緒的側面から内面に注目する要素を中心とした汎用性が高く、かつ研究データの蓄積と比較がしやすいという利点があるためと考えられるが、PM に注目することの今日的意義を考える時、このような包括的定義に拠って議論を進めることは重要であろう。

### Ⅲ 実証研究からみた PM の特徴

包括的定義の提案ののち、PM の実証研究の報告は急速に増加したが、PM の測定についてもこれまでいくつかの方法が提唱されてきた。初期の頃は、精神分析や力動的精神療法の適応を予測するものとして PM が注目されてきた経緯もあり、PM の測定に最も広く使用されてきた方法は臨床面接である<sup>19,20)</sup>。その後、記録された面接データから PM の程度を測定する研究もなされた<sup>12)</sup>。McCallum & Piper<sup>21,22)</sup> は、構造化面接のビデオテープを使用して、PM を測定する方法 (The Psychological Mindedness Assessment Procedure: PMAP) を開発した。これは台本のある面接の様子を被験者にビデオで見せ、そのやりとりをどのように捉えたか回答させ、その回答内容から PM を評価する方法である。PMAP は一人当たり15分程度で実施できるという利便性と、高い妥当性と信頼性が報告されている。

そのほかにも言語連想検査<sup>15)</sup> や TAT を利用したもの<sup>8)</sup> がある。前者は、言語連想検査の結果から防衛機制を予測させるという課題を使用した測定方法であり、後者は、TAT カードを提示しながら人物 A と B の作ったという TAT 物語を被験者に聞かせ、人物 A と B がそれぞれどのようなパーソナリティであるか回答させることによって測定するものである。

面接法や投映法を利用した査定法が望ましい尺度特性を有していても、やはり多くのデータを効率的に収集するには、自記式質問紙法と比べ不利であり、ほとんどの PM の実証研究は質問紙法で行われている。実証的尺度の中でも PM の測定にもっとも頻繁に使われてきたものは18個の下位尺度がある California Psychological Inventory (CPI) の中の、28項目からなる下位尺度 Psychological Mindedness (Py) である<sup>10)</sup>。CPI は臨床目的で開発されたにもかかわらず研究領域でも使用されている<sup>23)</sup>。ただし表面的妥当性 (face validity) に乏しく、再テスト信頼性も低い点が難点であり、1990年代に入ってからほとんど使用されていない。The Insight Test<sup>24)</sup> は27個の仮説的状况で良いあるいは悪い判断をするときの防衛機制をどの程度特定できるかを測定することで PM を評価する質問紙である。この尺度は、信頼性は十分に有しているものの、内的整合性がやや低く、PM を能力 (skill) のみで定義していること、そして回答者が答えにくい質問項目がある、などが難点だと言われている<sup>21,25)</sup>。Private Self-Consciousness Scale<sup>26)</sup> はいくつかの研究で PM を測定する尺度として使用されている<sup>27)</sup>。しかしながら、自意識と PM は同義語ではあるが決定的に異なる概念であり、自意識は PM の概念の一部であると考えられる<sup>27)</sup>。そのため、PM 研究において確立された測定尺度とはいいいにくい。包括的定義をもとに項目を構成し、臨床・非臨床サンプルを用いて因子分析を行い、尺度特性も確認されたものが45項目からなる Psychological Mindedness Scale (PMS)<sup>28,29)</sup> である。この尺度は多くの実証研究において使用されている。ただ、PMS もサンプルによっては異なる因子構造を呈したり、その際に複数の項

目が除外されたりすることは今後検討が必要な点であるといえよう。Nyklíček と Denollet<sup>30)</sup> は 2 因子14項目からなる Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM) を開発した。これは PM を興味と洞察力の 2 側面から測定しようとしたもので、他の PM 尺度と比して、施行の利便性が高い。また、尺度特性も優れている。

以下にこれまでの実証研究を、1. PM を心理療法の予測因子として検証した研究、そして2. PM をパーソナリティ特性として検証した研究の2つに分類して概説する。

### 1. 心理療法の予測因子としての PM

元来 PM は心理療法への適応の文脈から提唱されたため、PM と心理療法にとって重要と考えられるさまざまな変数との関連性について検証がなされている。Conte ら<sup>28)</sup> は、無作為に抽出された精神科外来患者44名を対象に、PM と心理療法の出席数との関連を検証した。その結果、PM と心理療法の出席数との正の相関が確認された。また、心理療法の出席数と症状の改善も同様に正の相関がみられた。この結果は、PM が高い人ほど心理療法に積極的に関与しその利益を得るといふ、これまで経験的に述べられてきた仮説<sup>1,25,28,31,32)</sup> と一致している。同様の結果が、デイケア患者を対象にした研究でも報告されている<sup>33,34)</sup>。また、グループ精神療法に関しても出席数との関連のほか、社会的適応や抑うつ気分の低減といった良好な治療アウトカムと PM との関連が認められている<sup>21,33)</sup>。この結果を踏まえると、心理療法のアセスメントにおいてクライアントの PM を把握することは、心理療法の継続を予測するだけでなく、クライアントに対する心理療法の有効性を把握するうえでも有意義であることが考えられる。

高い PM が心理療法への高い出席率に関連することが事実であるとはいえ、PM は決して心理療法セッションに欠席せずに通おうという真面目さや、あるいは通わねばならないといった強迫性に関連する構成概念ではない。Beitel ら<sup>35)</sup> は、大学カウンセリングセンターに通っている104人のクライアントを対象に、PM と心理療法に関する期待との関連を調べた。心理療法に関する期待は71項目からなる Expectations-about-counselling scale (EAC-B)<sup>36)</sup> によって査定された。EAC-Bは心理療法に関する期待の 5 側面、それぞれ、クライアントの態度 (motivation, openness, and responsibility)、クライアントの属性 (realism)、セラピストの技法 (acceptance, confrontation, directiveness, empathy, genuineness, nurturance, self-disclosure)、セラピストの属性 (attractiveness, expertise, tolerance, trustworthiness)、プロセスとアウトカム (concreteness, immediacy, outcome) からなる尺度である。その結果、“心理療法セッションが、痛みを伴うつらいものであっても治療に来るつもりだ” といった自己への期待と、“自分や他者についてのよりよい理解が得られるはずだ” といったプロセスとアウトカムへの期待は、PM と正の相関を示した。一方、PM とセラピストに関する期待とは関連がみられなかった。これらの結果より、Beitel らは高い出席率で心理療法に関与しようとするのは、PM が自己の内面に注目する心理療法に抱く期待 (expectation) と関連があるためだと結論付けた。したがって、心理療法の適応や出席率との関連は、PM の高い人の示す内面に注目する傾向や意欲との関連によって生じるといえる。この点を踏まえると、PM は心理療法との関連のみではなくパーソナリティ特性の一つとして、より幅広く個人の特性との関連性を検証する方向性が見いだされる。そこで、次にパーソナリティ特性としての PM の実証研究を概観する。

## 2. パーソナリティ特性としてのPM

Conteら<sup>37)</sup>は、大学病院精神科に通う65人の外来患者を対象に、PMと標準化された性格検査Personality Profile Index (PPI)との関連を調べた。PPIは89項目からなる質問紙で、受容(acceptance)、従順さ(submission)、受動性(passively)、拒絶(rejection)、抑うつ(depression)、攻撃性(aggression)、自己主張(assertion)、社交性(sociability)の8つの下位尺度がある。その結果、PMと自己主張、社交性との正の高い相関が、また、抑うつとの負の相関がみられた。彼らはまたthe Ego Function Assessment (EFA)<sup>38)</sup>を使用し、192人の精神科クリニックの外来患者のPMと自我機能との関連を調べた。EFAによって明確にされる自我機能は、統制力、統合力、自律性、刺激制御の4側面である。その結果、刺激制御を除く、全ての自我機能とPMとの正の相関が確認された。BeitelとCecero<sup>39)</sup>は、NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI)のそれぞれの下位尺度、神経症傾向(Neuroticism)、外向性(Extroversion)、開放性(Openness)、調和性(Agreeableness)、誠実性(Conscientiousness)を独立変数、PMを従属変数とした重回帰分析で解析し、外向性、開放性がそれぞれ正の説明変数となり、神経症質が負の説明変数となることを見出した。これらの研究からパーソナリティ特性としてのPMは、内面の統率と外への働きかけの力の両面にかかわることがうかがわれる。

PMは理論的にはパーソナリティの構成概念のひとつとして捉えることができるが、その定義を鑑みるとメタ認知(meta-cognition)・精神無感知(mindblindness)・マインドフルネス(mindfulness)・心の理論(theory of mind)などの構成概念と重複するものではない<sup>35)</sup>。Hall<sup>9)</sup>は、その理論モデルから、PMはローカスオブコントロールと共通点が多いことを指摘したが、Beitelら<sup>40)</sup>は実際にthe Locus of Control Scale (LOC Scale)<sup>41)</sup>とPMとの関連を検証し、高いPMを示す人は内的ローカスオブコントロールの傾向にあることを明らかにした。また、その傾向性はローカスオブコントロールそのものではなく、あいまいさに対する耐性が高いことに加え、現実志向的思考を行う点に特徴があることを見出した。

気分や感情との関連を検証した研究からは、PMは一貫して、ウェルビーイングや満足感といった健康的でポジティブな気分や感情との正の関連が、そして抑うつやディストレスといったネガティブな気分や感情との負の関連が報告されている<sup>34, 39, 42, 43)</sup>。高すぎるPMは情緒刺激に対して反応するというよりはむしろ分析してしまう傾向があるため不健康につながるという理論的な議論が70年代後半に盛んに行われたが、これらの研究結果からは、PMがポジティブな特性の構成概念であることは明らかである。実際に、高いPMの人が分析することで情緒反応が乏しいことはなかったという報告もある<sup>44)</sup>。

以上概観したように、PMの実証研究データは着実に蓄積されつつある。現段階で明らかにされているPMの特徴をいかに今日の臨床場面で活用するか整理することが今後の研究の基礎となる。そこで最後に今日の臨床場面でPM概念に注目することの意義を検討する。

## IV 臨床場面でPM概念に注目することの今日的意義

これまで概観してきたように、臨床場面においてPMに注目することは、心理療法プロセスや心理療法への適応の予測や見通しをつけるという意味で有効な視点である。心理療法において内的体験が乏しいことは治療の進展を著しく困難な状態にしてしまう<sup>45)</sup>であろうし、反対に主観的

にも客観的にも内面を探究しようとする態度は心理療法を意義あるものとするだろう<sup>1)</sup>。ただ、PMを持ち出さずとも、クライアントの内面に注目する傾向やそれらに自ら意味づけする能力は多くの学派の心理療法家によって評価されてきた。それにもかかわらず、今日の臨床場面で積極的にPMという用語を意識することの意義はやはり、年々蓄積されていく実証研究の知見を踏まえることで、臨床活動がより責任のもてるものとなる点にある。

ひとつには心理療法場面での見立てにおける有用性がある。まず、PMが高いクライアントはパーソナリティの健全さにおいてある程度信頼を置くことが可能となろうし、逆の場合はさらにもどのような要因によってクライアントの自我が保たれているのか、あるいはいないのか検討する糸口となろう。また、このようにクライアントが心理療法に訪れたその時点における横断的な見立てだけでなく、クライアントのPMの程度が高く（あるいは低く）なった、あるいはならざるを得なかったこれまでの生き方という縦断的な視点から見立てることは、臨床像としてより立体的なクライアント理解へとつながることが期待される。ケースによっては、高いPMが豊かなコミュニケーションの中で育まれたものであることもあろうし、虐待環境など他者の内面に敏感にならざるを得なかった生き方から発達したものもあるかもしれない。この場合、抽象的思考の発達の理論も援用することがより有効であろう。また、心理療法セッションの参加の予測についてもPMの視点は有効であろう。クライアントのPMが高ければ、心理療法へのコミットメントは高くなることが考えられるが、低い場合はそれが困難になり出席率が低くなることが予測される。そのようにPMが低いクライアントの場合、心理療法のオリエンテーションにもよるだろうが、内面や情緒体験の理解に焦点を当てて関係性の構築に失敗するよりは、セッションを期間限定的なものにするとか、内面の探索といった作業よりもむしろ環境調整をメインに考えることもできよう。見立ては心理療法のプロセスの中で修正されていくことを踏まえると、PMの変化も一つの要因として浮かび上がる。そのため、次に挙げるアウトカムとしての注目の有用性が示唆される。

PMが健全なパーソナリティの側面の一つであり、それが能力という要素を含んでいることを鑑みると、PMが発達する構成概念である<sup>16)</sup>ということをもち出さずとも、可変性のある要素として、心理療法の適用ではなくアウトカムとして注目することが可能となる。心理療法を通して、認知や情緒、そして行動との関連に注目することの重要性に気づくことは心理療法の目的でもある。そのため、心理療法体験からPMがより発達し問題の解決につながった（あるいは、心理療法の終結を迎えることができたと言い換える方がよいかもしれない）段階では、PMの変化が期待される。これまではPMの変化は経験的に、洞察というアウトカムを通して指摘されたことであり<sup>1)</sup>、PMそのものに注目して検証したものはないが、これを科学的に実証していくことはPM研究だけでなく、心理療法のプロセス研究としても重要であろう。とはいえ、これまでPMはアウトカムを予測する要素すなわち影響因として検証された研究はあるが、PMそのものを可変性の要素つまりアウトカムとして取り扱ったものはない。そのため、PMが発達していく構成概念であるとしても<sup>16)</sup>、心理療法という限定された期間とかかわりの中でどの程度の変化が期待されるかは今後の研究を待たねばならない点である。

そして、治療側の教育や訓練に関してPMの適用可能性を指摘することができよう。クライアントが心理療法の中で自らを取りまく環境や出来事を考察していくように、治療者もまたそのクライアントの環境や出来事の関連を理解しようとする。そのような治療者の能力や傾向はPM

として治療者がクライアントをより深く理解しようとする態度と通ずるものがある。つまり PM はクライアント側に求められる資質のみならず、治療者側の重要な属性といえる<sup>8,44,46)</sup>。したがって、治療者の教育や訓練にとって PM の視点を加えることは有意義と考えられる。教育や訓練で PM の重要性を治療者が認識を深めることは有効であるとはいえその方法論はもちろんまだない。PM を理解することは、心理療法のプロセスはもちろん、臨床スーパービジョンで治療者自身を理解していく多くのプロセスがそうであるように、体験的になされることが望ましいのではないだろうか。PM の定義を字義的に理解するだけでは自身やクライアントの PM を把握することが難しいことは想像に難くない。そこで本稿では、まず自分の PM を知る作業をすることを提案したい。クライアントの内面理解を行うことは初学者には難しいものであり、その前段階として自分の PM を探索するわけである。その際 PM の質問紙尺度を活用することが可能ではなからうか。質問紙尺度は本来クライアントの査定に用いるものであるが、一つ一つの項目は PM の程度を問うてくるものである。それらを自分に向けて問いかけることにより自分の PM を振り返るという使い方をするのである。質問項目それぞれについて回答することは自分の PM ありようを探索することになり、それらの探索が同様に心理療法セッションでのクライアントの内面のありようをたどる力につながるのである。治療者に対する PM の体験的な理解を促す教育・訓練的なその他の利用は、今後の報告が待たれるところである。

## V まとめ

本論ではこれまでの PM の定義に関する議論や実証研究の報告を整理し、PM を臨床現場で活用することの今日的意義を検討した。PM 概念はもともと臨床の場から注目され取り扱われた経緯を踏まえると、PM は臨床現場でもっとも活用されうるものであろう。しかしながら、PM は心理療法への影響因としてだけでなく、健全なパーソナリティ特性の一つとして検討されていることを踏まえると、PM は臨床現場に限らず、発達援助や教育の領域でも活用されうる概念であることも浮き彫りになってくる。前者に関する今後の重要な課題の一つは、発達の視点から PM がどのように形成されるのかを明らかにすることであり、また、形成を促す働きかけはいかに行われるべきかを明らかにすることであろう。近年では発達研究の領域から、PM の発達について、理論的アプローチに加え、アタッチメントとの関連から検証したものが報告されている<sup>47-51)</sup>。その他 PM 研究の課題は、縦断的研究によって、一貫性の程度やどのようなアウトカムの子予測因子となりうるのか検証していくことであろう。このような研究の報告により、より立体的な PM 理解と教育など臨床現場以外への応用が期待される。

本論では PM の文化差の可能性については触れていないが、PM をパーソナリティの一側面という視点から捉えると、日本での PM の特質はこれまでに論じられていない特徴が明らかになる可能性もある。そのため、今後は文化差の比較も PM 研究の重要な論点となろう。

### 【引用文献】

- 1) Appelbaum, S. A. "Psychological-mindedness: Word, concept and essence" *International Journal of Psycho-Analysis*, 54, 35-46, 1973
- 2) Taylor, G. J. "Psychoanalysis and empirical research: The example of patients who lack



- psychological mindedness” *Journal of the American Academy of Psychoanalysis and Dynamic Psychiatry*, 23, 263-281, 1995
- 3) Freud, S. On psychotherapy. S. E. 7, 1905. 小此木啓吾 (訳) フロイト著作集 9 技法・症例篇, 人文書院, 13-24, 1983
  - 4) Freud, S. Further recommendations in the technique of psycho-analysis: I. S. E. 12, 1913. 小此木啓吾 (訳) フロイト著作集 9 技法・症例篇, 人文書院, 87-107, 1983
  - 5) Freud, S. Analysis terminable and interminable. S. E. 23, 1937 井村恒郎, 小此木啓吾ほか (訳) フロイト著作集 6 自我論・不安本能論, 人文書院, 377-413, 1970
  - 6) Namnum, A. “The problem of analyzability and the autonomous ego” *International Journal of Psycho-Analysis*, 49, 271-275, 1968
  - 7) Moore, B. E. & Fine, B. D. *A glossary of psychoanalytic terms and concepts (2nd ed.)*, Oxford: England., 1968
  - 8) Wolitzky, D. L., & Reuben, R. “Psychological-mindedness” *Journal of Clinical Psychology*, 30, 26-30, 1974
  - 9) Hall, J. A. “Psychological mindedness: A conceptual model” *American Journal of Psychotherapy*, 46, 131-140, 1992
  - 10) Gough, H. *California Psychological Inventory*, Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press, 1975
  - 11) Baekeland, F., & Lundwall, L. “Dropping out of treatment: A critical review” *Psychological Bulltin*, 82, 738-783, 1975
  - 12) Ryan, E. R., & Cicchetti, D. V. “Predicting quality of alliance in the initial psychotherapy” *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 173, 717-725, 1985
  - 13) Kirter, W. L., & Cartwright, D. S. “Success and failure in client-centered therapy as a function of client personality variables” *Journal of Consulting Psychology*, 22, 259-264, 1958
  - 14) Rice, L. N., & Wagstaff, A. K. “Client voice quality and expressive style as indexes of productive psychotherapy” *Journal of Consulting Psychology*, 31, 557-563, 1967
  - 15) Dollinger, S. J., Greening, L., & Tylenda, B. “Psychological-mindedness as “reading between the lines”: Vigilance, locus of control, and sagacious judgment” *Journal of Personality*, 53, 603-625, 1985
  - 16) Hatcher, R., Hatcher, S., Berlin, M., Okla, K., & Richerds, J. “Psychological mindedness and abstract reasoning in late childhood and adolescence: An exploration using new instruments” *Journal of Youth and Adolescence*, 19, 307-326, 1990
  - 17) Nyklíček, I., & Poot, J.C. “Psychological mindedness in relation to personality and coping in a sample of young adult psychiatric patients” *Journal of Clinical Psychology*, 66, 34-45, 2010
  - 18) McMurran, M., & Jinks, M. “Making your emotions work for you: A pilot brief intervention for alexithymia with personality-disordered offenders” *Personality and Mental Health*, 6, 45-49, 2012
  - 19) Piper, W. E., Debbane, E. G., Bienvenu, J. P., & Garant, J. “A comparative study of four forms of psychotherapy” *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 52, 268-279, 1984
  - 20) Coltart, N. E. C. “The assessment of psychological-mindedness in the diagnostic interview” *British Journal of Psychiatry*, 153, 819-820, 1988
  - 21) McCallum, M., & Piper, W. E. “The psychological mindedness assessment procedure” *Psychological Assessment*, 2, 412-418, 1990
  - 22) McCallum, M., & Piper, W. E. “The psychological mindedness assessment procedure” In M. McCallum & W. E. Piper (eds.), *Psychological mindedness: A contemporary understanding*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 27-58, 1997
  - 23) Helson, R., & Roberts, B. W. “Ego development and personality change in adulthood” *Journal of*

- Personality and Social Psychology*, 66, 911-920, 1994
- 24) Tolor, A., & Renznikoff, M. "A new approach to insight: A preliminary report" *Journal of Nervous and Mental Diseases*, 130, 286-296, 1960
  - 25) Abramowitz, S. I. & Abramowitz, C. V. "Psychological-mindedness and benefit from insight-oriented group therapy" *Archives of General Psychiatry*, 30, 610-615, 1974
  - 26) Fenigstein, A., Scheier, M., & Buss, A. H. "Public and private self-consciousness: Assessment and theory" *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 43, 522-527, 1975
  - 27) Grant, A. M. "Rethinking psychological mindedness: Metacognition, self-reflection, and insight" *Behaviour Change*, 18, 8-17, 2001
  - 28) Conte, H. R., Plutchik, R., Jung, B. B., Picard, S., Karasu, T. B., & Lotterman, A. "Psychological mindedness as a predictor of psychotherapy outcome: A preliminary report" *Comprehensive Psychiatry*, 31, 426-431, 1990
  - 29) Conte, H. R., & Ratto, R. R. "Self-report measures of psychological mindedness" In M. McCallum & W. E. Piper (eds.), *Psychological mindedness: A contemporary understanding*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 1-26. 1997
  - 30) Nyklíček, I., & Denollet, J. "Development and evaluation of the Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM)" *Psychological Assessment*, 21, 32-44, 2009
  - 31) Piper, W. E., de Carufel, F. L., & Szkrumelak, N. "Patient predictors of process and outcome in short-term individual psychotherapy" *Journal of Nervous and Mental Disease*, 173, 726-733, 1985
  - 32) Sifneos, P. E. "Short-term anxiety-provoking psychotherapy: Its history, technique, outcome and instruction". In S. H. Budman (ed.), *Forms of brief therapy*, New York: Guilford., 45-81, 1981
  - 33) Piper, W. E., Joyce, A. S., Azim, H. F. A., & Rosie, J. S. "Patient characteristics and success in day treatment" *Journal of Nervous and Mental Disease*, 182, 381-386, 1994
  - 34) Trudeau, K. J., & Reich, R. "Correlates of psychological mindedness" *Personality and Individual Differences*, 19, 699-704, 1995
  - 35) Beitel, M., Hutz, Aida. Sheffield, K. M., Gunn, C., Cecero, J. J., & Barry, D. T. "Do psychologically-minded clients expect more from counseling?" *Psychology and Psychotherapy; Theory, Research and Practice*, 82, 369-383, 2009
  - 36) Tinsley, H. E. A. *Expectation about counseling*. Unpublished test manual, Fainsville FL: Southern Illinois University, Carbondale, 1982
  - 37) Conte, H. R., Ratto, R., & Karasu, T. B. "The Psychological Mindedness Scale: Factor structure and relationship to outcome of psychotherapy" *Journal of Psychotherapy Practice and Research*, 5, 250-259, 1996
  - 38) Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H. *Ego functions in schizophrenics, neurotics, normals*, New York: Wiley, 1973
  - 39) Sharp, V., & Bellak, L. "Ego function assessment of the psychoanalytic process" *The Psychoanalytic Quarterly*, 47, 57-72, 1978
  - 40) Beitel, M., & Cecero, J. J. "Predicting psychological mindedness from personality style and attachment security" *Journal of Clinical Psychology*, 59, 1-10, 2003
  - 41) Beitel, M., Ferrer, E., & Cecero, J. J. "Psychological mindedness and cognitive style" *Journal of Clinical Psychology*, 60, 567-582, 2004
  - 42) Rotter, J. B. "Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement" *Psychological Monographs*, 80, 1-28, 1966
  - 43) Shill, M. A., & Lumley, M. A. "The Psychological Mindedness Scale: Factor structure, convergent

- validity and gender in a non-psychiatric sample” *Psychology and Psychotherapy*, 75, 131-150, 2002
- 44) Smith, A. J. M., Kleijn, W. C., Trijsburg, R. W., Segaar, J. A., van der Staak, C. P. F., & Hutschemaekers, G. J. M. “The psychological mindedness assessment procedure-validity study of a Dutch version” *Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 82, 185-197, 2009
- 45) Farber, B. A. “The genesis, development, and implications of psychological-mindedness in psychotherapists” *Psychotherapy*, 22, 170-177, 1985
- 46) Horney, K. “The paucity of inner experiences” *American Journal of Psychoanalysis*, 12, 3-9, 1952
- 47) Farber, N., & Golden, V. “Psychological mindedness in psychotherapists” In M. McCallum & W. E. Piper (eds.), *Psychological mindedness: A contemporary understanding*, Mahwah, NJ: Erlbaum, 211-234, 1997
- 48) Alvarez, J. R., Farber, B. A., & Schonbar, R. A. “The relationship of psychological-mindedness to adult perceptions of early parental rejection” *Journal of Clinical Psychology*, 54, 1079-1084, 1998
- 49) Berry, K., Shah, R., Cook, A., Geater, E., Barrowclough, C & Wearden, A. “Staff attachment styles: A pilot study investigating the influence of adult attachment styles on staff psychological mindedness and therapeutic relationships” *Journal of Clinical Psychology*, 64, 355-363, 2008
- 50) Bourne, K., Berry, K., & Jones, L. “The relationships between psychological mindedness, parental bonding and adult attachment” *Psychology and Psychotherapy*, (in press)
- 51) Hatcher, R. L., & Hatcher, S. L. “Assessing the psychological mindedness of children and adolescents” In M. McCallum and W. E. Piper (eds.), *Psychological mindedness: A contemporary understanding*, Mahwah, NJ: Erlbaum, 27-58, 1997

